令和４年度　学　校　評　価　書

山形県立村山特別支援学校

学校教育目標　すすんで学び、よりよく生きる人を育てる　　**めざす子ども**　心も体も元気な子ども　生活する力のある子ども　自分の思いや気持ちを伝える子ども

教育方針（１）一人一人が今もっている力や特性を的確に把握し、また本人や保護者の思いや願いを踏まえ、育てたい力（育成すべき資質能力）を整理します。
（２）必要な知識や技能、思考力、判断力、表現力などを、子どもたちが受け身ではなく主体的にすすんで学び身に付ける日々の授業を展開していきます。
（３）卒業後の生活の中で、暮らすことや働くこと、余暇を楽しむことなどを通して、生涯にわたってよりよく生きることができるよう人を育てていきます。

【評価】「達成度」　Ａ：達成できた（８割以上）　Ｂ：ほぼ達成できた（６～７割）Ｃ：あまり達成できなかった（４～５割）　Ｄ：達成できなかった（３割以下）
保護者、教員アンケートによる評価＜Ａ～Ｄの４段階評価の内、ＡとＢ合計の割合＞　達成できた（８割以上）　ほぼ達成できた（６～７割）　あまり達成できなかった（４～５割）　達成できなかった（３割以下）
（教）教務部　（総）総務部　（学）学習研修部　（生）生徒部　（保）保健体育部　（進）進路部　（研）研究部　（相）相談部　（情）情報部　（小）小学部　（中）中学部　（高）高等部

今年度の重点　Ⅰ　安心・安全な学校

項目	具体的方策・評価指標等	達成状況	達成度 評価項目	課題及び改善策
①　登下校・授業中の安全 （小、中、高、生、保）	○駐車場内の安全確保。危険な事案は保護者に周知（小） ○単独通学生について、情報提供があった場合は迅速にチームで対応（高）（生） ○ケガ、事故、ヒヤリハットの情報共有。職員室掲示板に記入。終礼で周知（保） ○いじめ、校内安全、環境整備について、継続指導、組織で対応（小、中、高） ○予防的な指導を重視。連携し対応（生）	○教員が協力し通学指導や乗車指導を実施できたことで、交通マナーや学校生活でのきまり等について指導が必要な点について情報を共有したり指導したりすることができた。（生） ○ヒヤリハットについて速やかに掲示し情報の共有ができた。また全体周知事案を保体部が終礼で報告できた。（保） ○学校生活アンケートを実施し、生徒の悩み等を把握できた。（生）	Ａ 保護者１ 保護者４ 教員１ 教員２ 教員４	○登下校時における駐車場での安全確保（特に小学部について） ・保護者へお便りなどで注意喚起。児童にも繰り返し指導（教） ○緊急連絡先一覧作成期日について ・５月中旬を目処に完成。遅れている家庭へ再依頼。期限を設けて途中段階でもファイリングする。（生） ○校内での事故・ケガの防止 ・迅速かつ適切な教員の対応と防止策として鍵の工夫（教） ・ガラスの破損や飛び出し等について、児童生徒の行動を予測しながらかかわる。
②　新型コロナウイルス感染症対策を講じた学習環境 （小、中、高、教、学）	○マスク着用が苦手な児童生徒に対し、短時間から慣れるように指導。丁寧な手洗い、正しい着用も継続指導（小、中、保） ○図書室の活用を促す。感染症対策を講じながら図書室利用を検討。（学研） ○儀式等をzoomで行う際の準備や音量調整などについて役割を分担して情報部だけに負担のないようにする。（教務）	○手洗いやマスクの着用について、自らできる児童が増えた。（小） ○保健分野（手洗い・性指導等）の学習を計画的に実施し、特に手洗いの指導を丁寧に行い習慣化した。マスクの着用も、繰り返し指導し、定着してきている。（中） ○給食指導は感染症予防に注意し喫食できた。支援をする教員はフェイスシールドも着用する必要性を確認・周知した。（保） ○Zoom配信の環境調整（音声や映像、操作等）を工夫できた。	Ａ 保護者１ 教員５ 教員	○マスクの正しい着用について ・定期的にマスク着用の言葉掛けや練習。素材や着用について家庭と連携。衛生・保健学習を定期的に設定（小）（中） ○感染症対策の徹底（健康観察等） ・今後もいろいろな場面で保護者の理解と協力を得る。（教） ○学級閉鎖・学年閉鎖時の学習保障 ・学校と各家庭をオンラインでつなぎ学習できる準備を整える。 ・年度当初に各家庭のインターネット環境の確認やオンライン学習の周知。他校の実践例を収集。各分掌部と連携（情）
③　家庭や関係機関と連携した心と体の健やかな育成 （保、生、相、小、中、高）	○継続支援について相談部や管理職と相談しながらより良い支援・連携に努める。（小）（中）（高）（生徒） ○家庭支援が必要な不登校生への対応についての関係機関との連携。（中） ○家庭への支援が必要な児童生徒について市町村との連携を深める。（相） ○支援が難しい児童生徒について、外部専門家配置事業の活用（相） ○『からだ・いのち・こころの学習』について、体育の年間計画に計上、日生や生単等に明記し、計画的に取り組む。実践内容を記録保存し次年度につなげる。 ○教職員と保護者対象の研修会を実施し、性教育の必要性を共有。（保）	○月１回のケース会設定日により、計画的なケース会の設定や役割分担をすることができた。校内ケース会 16 件、外部機関との連携会議　約３０件実施（相） ○不登校生徒の進路変更に伴い、保護者との丁寧な相談や相談事業所との情報共有と連携できた。（高） ○市町子ども家庭支援課等との定期的、継続的な情報共有と連携ができた。（小、高） ○専門家による訪問指導実施（小重複学級、自立活動の指導助言）（相） ○『からだ・いのち・こころの学習』について、今後も計画通り実施できるようにしたい。（保） ○肥満傾向児が多い。家庭に協力依頼しているが、肥満解消につながるケースは少ない（保） ○「性教育」研修会実施できた。（職員・保護者対象、婦人科医師による講話）（保）	Ａ 保護者７ 保護者８ 教員３ 教員	○生活リズムが整わない、登校時間が守れない生徒への対応 ・今後の生活（進路指導）についても触れながら、生活リズムを整える必要性を家庭と共有し協力を得る。（中） ○感情や行動調整に課題、飛び出しのある生徒の指導。 ・生徒の気持ちに寄り添いながら、適切な行動や言動を繰り返し伝える。視覚支援の活用や環境の調整など有効な支援を探る。ケース会を活用し指導方針等を確認して指導する。（中） ○生活リズムの改善に向けた家庭との連携 ・現場実習や卒業後の生活に関連する学習を機に、継続的な支援が必要な課題について家庭と連携して指導に当たる。（高） ○他者との望ましいかかわり方の継続的な指導 ・学習の中で場面を多く設定し、望ましいかかわり方のモデルを示す。友達の個性や特性を認め合う集団づくりを目指す（高） ○肥満傾向児童の運動機会の確保 ・元気ジムの活用、室内等でできることを工夫し運動量増（小）
④　働き方改革の取組	○ICT活用による業務改善	○中学部教員が小学部授業に支援。教員が多数不在時に学年間での協力、学年を越えて支援。児童同士のトラブル発生の際に学年・学部を越えて協力した。（小） ○むらとく公式 YouTube の活用（進路研修会の各学部に分けた動画のオンデマンド配信）（情） ○ICT 端末活用研修実施。Gmail 活用・運用への切り替え（情） ○指導者端末整備完了（情） ○全国学校体育大会に係る業務量がかさみ負担感が強い。次年度、全国大会ではさらに忙しくなることが予想できる。	Ａ 保護者９ 教員１４ 教員１５ 教員１６	○感染症関係による相談担当者の変更への対応 ○ICT活用による業務改善 ・行事等反省はGoogleのフォームズを活用し、ペーパーレス、業務削減につなげる。 ・情報部、教務部、学習研修部などと連携して取り組む。（情） ○休憩時間における通学指導等に伴う休憩時間等の確保（生） ・年度当初に全体に対して周知（一斉休憩時間外で個別休憩可） ○会計処理の負担軽減（処理方法等）（小） ○全国大会にむけた校内組織の改善と工夫 ・授業者について軽減できる仕事を明確にする。（研）

今年度の重点　Ⅱ　一人一人に応じた指導・支援の充実				
項目	具体的方策・評価指標等	達成状況	達成度 評価項目	課題及び改善策
①　個別の指導計画の活用による児童生徒が身に付ける力を明確にした指導の充実 （教、学、小、中、高）	○「領域・教科等を合わせた指導」について根拠や目標設定、評価、単元で教科毎にねらっていることを明らかにするような年間指導計画や個別の指導計画を学研部や研究部と連携して検討する。（教） ○学習指導要領に基づき、各教科の学習状況を整理・把握し、児童生徒が学ぶ内容を明確にしてつないでいけるように学びの履歴シートの活用を学研部と連携して検討する。（教） ○国語・数学については、より実態に応じた学習を組むことができるように、学習グループ等について検討を行う。（中） ○保健体育について、学習グループと学習場所、単元の配列等について検討し年間学習指導計画を作成し活用する。（中） ○国語・数学の導入に当たり、小・中の学習内容表（達成度）を参考にし、系統性や他教科との関連性を図りながら年間学習活動計画を作成する。（高） ○情報部と連携しながら教材の開発、情報提供を行う。（学） ○GIGAスクール構想に伴い、一人一台端末の整備を整えていく。また、学部や作業班毎にGアカウントを作成し、動画教材の共有や活用を拡げる。（情）	○「領域・教科等を合わせた指導」と教科との関連、示し方について・管理職と教務部等で方針について検討中。 ○「学びの履歴シート」や学習指導要領巻末「目標・内容一覧」を活用し、各教科の実態把握目標設定の参考にすることや、合わせた指導と教科との関連を示す資料も年間指導計画等に記すことについて学研部と連携し検討した。（教） ○国語・数学について、学級内で実態に応じてグループ化し学習に取り組んだ。学習状況について学部内で情報を共有できた。（中） ○保健体育について、学習グループや単元配列等を見直し、年間学習指導計画を作成し活用した。（中） ○国語・数学の導入に当たり、年間学習計画を作成し活用し、実態に応じてグループ別に取り組んだ。毎日、２０分間の学習であるが積み重ねによる成果があった。（高） ○生徒端末整備完了。ドライブを作成し、写真や動画を共有できるようにした。（情報）	A 保護者３ 教員６	○新型コロナ感染拡大の影響による経験不足 ・不足している体験や経験を整理し、映像の活用・校内での体験学習等のやり方を工夫する。（小） ○重複在籍児童の実態差に応じた指導体制 ・重複学級合同学習の時間にねらいに沿ったグルーピングを行い、学習を積み重ねていく。（小） ○感情のコントロールの仕方、意思伝達、適切なかかわり方への指導の工夫と指導の充実 ・落ち着ける方法を探りながら個に応じた対応をする。適切な行動や話し方、距離感などその都度指導する。苦手なことにもスモールステップで繰り返し取り組み自信につなげる。（小） ・学年会で児童理解の時間を取り、学年担任間で共通理解をして支援していく。（小） ○国語、数学等の指導内容と方法・教材の共有化 ・作った教材を共有ドライブに挙げる、共有ドライブを活用して動画教材や編集教材を共有する、学習プリント類を分類して保管する等。（中）
②　一人一人のニーズに合わせた進路指導・就労支援の充実 （進）	○高等部前期実習で２・３年生が同期間に実施でも希望する実習先で実施できるように、実習予備日を設定する。１月の進路面談、２月の前期実習先アンケートを受けて、複数の希望者がいた場合は実習先と相談して調整する。（高）（進） ○保護者教職員ともに、小学部段階からの進路指導等の研修等で理解を深めることができるように、学部ごとの進路研修会等を計画する。（進）	○高等部産業現場等における実習では、希望した生徒全員が実習できた。実習マニュアルをもとに、高等部教員全員で役割分担し、実習担当が適切に指導・支援できた。（高） ○進路研修会は、各学部のキャリア発達やニーズに合わせた演題選定や講師依頼ができた。情報部の協力でライブ配信やオンデマンド配信し、広く視聴できた。また、研修会の資料を配布して保護者のニーズに対応できた。（進） ○PTA就労支援部研修会に際し、高等部とその他希望する保護者を対象に実習・就労を実現するための家庭での土台作りと就労コーディネーターの役割について説明できた。（進）	A 保護者 教員７	○自分からの挨拶、必要場面での報告や適切な言葉遣いの指導 ・教師が手本を示しながら、場を捉えた指導を繰り返す。 挨拶する相手を意識できるような働き掛けをしていく。（中） ○コロナの影響で実習ができなくなった場合の実習日数の確保 ・高等部の現場実習と中学部の就労体験学習共に予備日を設け、全員が実施できるように計画する。（進） ○進路に関する情報提供の工夫 ・学部ごとの掲示物や資料提供の工夫はできたが、引き続きニーズを把握し、充実する。職員向け研修等も実施する。（進） ・進路だよりに学部のコーナーを作り、事業所紹介など学部のニーズに合わせた情報を発信する機会を設ける。（進）
③　教員の専門性向上 （相、学、研、小、中、高）	○初めて巡回相談に当たる場合は、複数で対応できるようにする。（相） ○学校研究と絡めながら研究部と連携を図りながら研修会を行うとともに、職員からも研修会の希望を取る。（学研） ○チェックシートの効果や課題を整理し、次年度研究への結び付け方を明らかにする。（研）	○巡回相談では相談部内で事前に意見集約や打合せをするなど、事例を複数の目で見ることができた。また、経験者と未経験者とで訪問できたことで次の相談につなげることができた。（相） ○「する・みる・支える・知る」の視点を取り入れた授業づくりによって、児童生徒の運動のかかわり方を考えることができ、技能面だけでなく思考面での成長を捉えることができた。 ・視点を設定したことは特に専門外の教師にとって有効だった。従来の体育の授業のイメージから、長期的に「豊かな」「ライフ」につなげる必要性や価値があることが見出せた。 ・視点を生かしたくさん工夫できた。集団での活動自体に抵抗がある生徒も多様なかかわり方で授業に参加でき、他の授業にも取り入れられる成果があったと感じる。（研） ○専門性向上研修会（オンライン、本校教員６５名、外部参加５２名。外部講師よるキャリア教育についての研修）実施（学） ○ミニ研修（２回）を実施できた。実践の振り返りや学部の実情を踏まえた内容で行うことができた。（学）	A 保護者３ 教員８	

今年度の重点　Ⅲ　楽しく充実感のある授業の改善				
項目	具体的方策・評価指標等	達成状況	達成度 評価項目	課題及び改善策
①　豊かなスポーツライフのための授業創造	○昨年度の反省を生かした実践研究会や授業研究会を設定し、「できた！」「楽し	○各学年学級での取組（朝ランニング、体育、昼休みのプレイルームでの活動やラジオ体操・動画の運動・ダンスや散歩等）が意欲		○生涯のスポーツライフの具現化 ・卒後の生活を意識した授業の工夫、多様なかかわり方の視点を

（研、小、中、高）	い！」「もっとやりたい！」を目指す授業づくりに取り組み、豊かなスポーツライフに結び付く成果や課題を整理する。（研） ○授業実践について学部間での情報交換をスムーズにする。（研） ○「分かる」「できる」と実感できる授業づくり。運動の機会と運動量の確保、運動の習慣化と体力の維持向上。（高）	的に体を動かすことや体力作りにつながっている。（小） ○体育科で作成したダンス動画は、見ながら踊ることができ、運動量の確保につながっている。 ○保健体育や生単の授業、昼休みを中心に、積極的に体を動かす機会を多く設定したことで、運動を楽しんだり体力が付いたりする生徒が増えてきた。（中） ○朝運動や昼休み、自立活動の時間などを活用して、運動量の確保として継続的に取り組むことができた。朝のランニングのほかに、ダンス動画をきっかけに、いろいろなダンス、体力アップなどにも取り組むことができた。また、ヨガやストレッチに取り組んだ学年では、自分の身体の硬さに気付いたり伸ばし方が分かるようになったりといった成果も見られた。（高） ○保健体育では「する・みる・支える・知る」を柱に授業の実践を重ねたことで、学習活動の質の向上が見られた。「できた、楽しい」を引き出す工夫やＩＣＴの活用、競技における良いかかわり方の実践などを通して、高等部の生活全体に運動を楽しもうとする意欲や体育的な取り組みへの関心が高まった。（高）	A 保護者３ 教員９ 教員11	取り入れた一層の授業改善（研） ○保健領域の取り扱い ・年間指導計画等の整理・改善（研） ○運動の機会と運動量の確保 ・次年度、昼休みに体育館が使用できるならば、できる限り昼休みの時間など運動する機会を設けていく。（研） ○Google Workspaceを使った学習への取組 ・共有ドライブ（全体、各学部）の活用を推進していく。同時に活用法のマニュアルも提示していく。（情）
② 外部資源の協力要請、活用 （情、学、小、中、高）	○コロナ禍の中でも、交流が進められるように相手校、地域とのつながりをもつ。（学研） ○交流先と丁寧な連絡調整を行い、交流活動を有意義なものにし継続する。（小） ○新型コロナ感染状況に応じて、参観の時間や人数の調整、運動会やバザー等の実施の工夫を行い、保護者への情報発信をしていく。（中） ○授業参観の期間を長くとったり、参観の人数を調整したりすることで、参観していただけるようにする。（高） ○学校のホームページに情報を載せることで広く見られるようにする。（情）	○地域交流について ・城山太鼓交流の学習を実施できた。（学）（高） ・東北文教大学の協力を得て実施できた。（学）（小） ○学校間交流の実施 ・山形聾学校との交流（学）（小）（中）（高） ○居住地校交流について ・直接交流として小５年１名実施（学）（小） ○運動会（小上学年）体育まつり（中）実施 ○バザーについて ・「むらとくまつり」において実施（高） ・「校内バザー」実施（中） ・霞城セントラル１階アトリウムを会場に実施。（中）（高） ○学校ホームページからの情報発信（情）年１２回（R3年度９回）	A 保護者５ 保護者６ 教員10 教員12 教員13	○交流及び共同学習を通して児童生徒の社会参加と自立を目指す取組 ・新型コロナ感染防止対策をとりながら、直接交流や体験学習の実施を進めていく。 ○学校関係者や地域の方々に本校教育への理解を図る取組 ・新型コロナ感染防止対策をとりながら、参集型の学校公開を実施する。

＜学校評議員会より＞

【登下校の安全について】

・送迎車の出入りが見えやすいように駐車場出入り口に回転灯を設置してはどうか。

【家庭や関係機関と連携した心と体の健やかな育成について】

・働く人をサポートする立場から、在学中に健康管理や生活リズムについて自己管理が確立しているとよい。社会に出ると一層重要である。在学中から家庭との連携を大切にしてほしい。また学校から就労先へ情報が引き継がれるとよい。

【外部資源の協力要請・活用について】

・新型コロナウイルス感染拡大が収まってきており、地域交流は元に戻りつつあるようだ。今後も継続してほしい。芸工大学生との交流として学生と一緒に制作活動等も検討できるのではないか。

・山形大学理学部学生との「ものづくり（スライムづくりなど）体験」なども規模に応じてできるのではないか。

・今後は、より地域の方に広く学校の取組を知っていただくために、作業学習製品頒布会（バザー）については、大型店舗（イオンモール等）も利用できるのではないか。